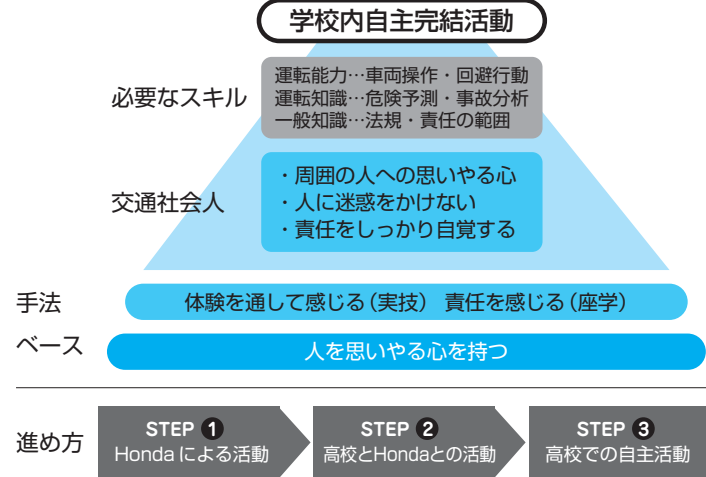


熊本県での高校生交通安全教育活動 連載:第1回
学校内での自主完結活動をめざすための第一歩

●活動の展開イメージ



●熊本県内の推進モデル校

県立	天草高等学校 熊本高等学校 熊本工業高等学校 熊本西高等学校 翔陽高等学校 済々黌高等学校 第一高等学校	第二高等学校 多良木高等学校 東稜高等学校 御船高等学校 八代東高等学校 湧心館高等学校
私立	開新高等学校 東海大学付属熊本星翔高等学校	

※2012年6月現在

●教育内容

自転車教育	自転車実技+座学	実技は、自転車や二輪車操作の難しさ、運転にまつわる認知、判断について学習し、普段の運転時に起こる危険を安全に、わかりやすく伝え、回避する方法を学ぶ。
原付教育	二輪車実技+座学	
感受性教育	交通安全座学	事故の事例から交通事故の怖さ、周囲への影響、事故に伴う責任の重さについて学び、グループ討議の手法を使い、自分の考え方や行動を見直す事学ぶ。

※各高校の状況に合わせて、上記の内容を学校内で完結できるようにする

この活動のベースには、「人を思いやる心を持つ」という教育的な観点がある。そして、自転車や二輪車(原付)の運転時における交通ルールやマナー、危険行動について、高校生が実技体験やグループ討議を通じて、自らが考え、自らが行動変容を促すことをねらいとしている。将来的には、高校生自らがインストラクターとなって校内

自らが考え、自らが行動変容を促す

ホンダでは高校生に対して、交通安全教育を通じ、社会生活におけるルールやマナー、人への思いやりなど、道徳心を養いながら豊かな人間性を育み、若く尊い命を守りたいと考えている。そのためには、高校生が安全運転に関する知識や意識を持ちながら、命の大切さや交通安全について主体的に考え、自ら行動できるようにするための学習機会の提供が必要である。

そこで、ホンダは今年4月より熊本県、熊本県警察本部、熊本県教育委員会の協力のもと、新たな高校生交通安全教育活動をスタートさせた。当コーナーでは、今号から数回にわたってこの活動の詳細を紹介していく予定である。

道徳心ある社会人を育てたいという思いに共感

4月5日には推進モデル校の熊本県立翔陽高校(熊本県大津町)で、本田技研工業(株)安全運転普及本部熊本普及ブロックによる「新規原付通学者安全運転教育」が実施された。同校生徒指導部交通安全担当の馬本

活動を行い、「自らの安全は自ら守る。自らの学校の安全は自分たちで守る」という自立による意識向上を図ることが目標である。

その内容は、自転車や原付を利用する高校生年代の交通実態に則し、説得ではなく納得性のある教育として、危険を安全に体験する参加体験型の実践教育を柱に、道徳的な教育(感受性教育)も加えて、真の交通安全教育に取り組むものである(左図参照)。そして、この活動は熊本県内の15の推進モデル校で既にスタートしている。

この日の実技では、「走る・曲がる・止まる」の中でも、最も難しい「止まる」に重点が置かれた。一人ひとり30km/hでコース内を走り、3カ所に設定された停止線の直前で止まる練習を繰り返す。前後のブレーキを正しく使っているか、左足で着地できているかなど、インストラクターがチェックしていく。また、発進する時には「必ず右後方を確認してください」とインストラクターが声をかける。交差点は、交差点でのサンキウ事故を防止するためのケーススタディ。交差

実際の交通場面での危険性を体験から学ぶ

竜司教諭は今回の活動について、次のように話す。「単に運転技術を向上させるのではなく、交通安全を通じて道徳心ある社会人を育てたいというホンダの思いに共感し、この活動に参加することにしました。これまでは教職員だけで指導してきましたが、ホンダのノウハウを吸収することで私たちが新たな刺激を受けたと思っています」。

今回、受講するのは、春休み中に原付免許を取得したばかりの新2年生27名。最初は講堂での座学。ホンダのインストラクターが、安全運転は自分だけでなく、相手の気持ちになって考えていくことが必要であると説明。交差点等での安全確認は、自分とともに他の車両や歩行者の安全を確保するという「思いやり」の意味があることを伝えた。そして、日常点検の目的と項目、二輪車の特性、事故防止に必要な危険予測のポイントを解説していった。

続いて、それらをふまえて、屋外での実技が始まる。まず、生徒たちに先ほどの説明に従って、自分の原付を点検してもらおう。その後、とっさの時に適切な操作ができるように、インストラクターが正しい運転姿勢を示す。全員が原付に乗車し、それを実際に体験した。

点の右折時に対向車が譲ってくれても、焦らず一旦停止し、対向車の死角から二輪車や自転車等が直進してこないか確認して右折を開始することを生徒に身につけてもらう。

最後は、四輪車の巻き込み事故のケーススタディ。四輪車の死角に原付を置く。四輪車の運転席に生徒が順番に座わり、ミラーには二輪車が映らないことを確かめる。死角に入ってしまうと、ドライバーから見落とされ、巻き

込み事故に遭う危険があることをインストラクターが伝えた。

馬本教諭は「今回は実際の交通場面での事故防止につながる指導など、参考になる部分がたくさんありました。この活動を通じて、私たちも含め学校全体がいかに成長していけるか楽しみにしています」と今後を期待する。

このような原付通学者への安全運転教育だけでなく、自転車教育も各推進モデル校で始まっている。

- インストラクターが正しい運転姿勢を説明。特に、足やひざが車体からはみ出さないように強調した
- 生徒は乗車前に各自でブレーキの効き具合、タイヤの空気圧や溝の深さ、灯火類の作動、燃料の量を確認
- 前後のブレーキの正しい操作方法を伝え、短い距離で安定して止まれるように繰り返し練習する
- 発進時には右後方の安全確認をする習慣を身につけてもらう
- サンキウ事故のケーススタディ。対向車に見立てた四輪車の死角にいる二輪車を確認して右折する
- 巻き込み事故のケーススタディでは、四輪車の死角を生徒自身の目で確認してもらう